

REACT

2015年 6月号



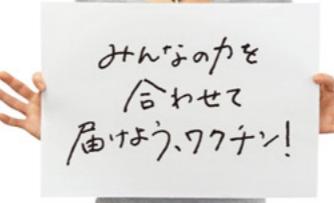
シリア 私たちには届けるべき援助がある

極限まで、そしてその先へ
—エボラ緊急援助の1年

中央アフリカ共和国 悲劇は終わっていない
国境なき医師団日本 定例総会・財務報告
派遣スタッフの声(シリア)



届け、ワクチン! 2015 キャンペーン



MSFの予防接種活動をご紹介する
沢田さやかロジスティシャン。

子どもたちの命を守るために必須の予防接種。病院に通うこと
もままならない紛争地、劣悪な生活環境の避難民キャンプ……
電気など設備もない場所にワクチンを届けて大勢の子どもたち
に接種するのは国境なき医師団(MSF)の重要な活動の一つ。

その課題と挑戦を広く伝え、支えていただくため、MSF日本は
4月末より今秋まで「届け、ワクチン! 2015」キャンペーンを展開
中です。医療・人道援助の現場で行う予防接種活動の様子や、
直面する課題を、アニメや動画、スタッフのブログ、「すごろく
ゲーム」など、豊富なコンテンツでご紹介。また、皆さんに写真や
メッセージを募り、「ワクチンを届けたい」気持ちを形にしていきます。
どうぞキャンペーンへのご協力を、よろしくお願ひいたします。

届け ワクチン 検索
または、www.msf.or.jp/todoke



特定非営利活動法人 国境なき医師団日本

寄付や『REACT』に関するお問い合わせ

0120-999-199 (9:00~19:00 無休)

〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1 早稲田SIAビル3階
Tel : 03-5286-6123(代表)

www.msf.or.jp

『REACT(リアクト)』は国境なき医師団(MSF)日本が発行するニュースレターです。MSFが活動現場で目撃する世界の人道的危機と、命を救うための人道援助活動についてお伝えし、ともに考えていただきための情報をお届けします。

国境なき医師団は、1971年にフランスで設立された、非営利で国際的な民間の医療・人道援助団体です。危機に瀕した人々との緊急医療援助を主な目的とし、医師、看護師をはじめとする約6000人の海外派遣スタッフと、約3万人の現地スタッフが、約70の国と地域で活動しています(2013年度)。

アンケートのお願い

国境なき医師団の活動地の状況と活動内容をより分かりやすくお伝えする
ために、ぜひアンケートにご協力ください。郵送またはウェブサイトにて、
ご回答いただけます。アンケートにご協力いただいた方の中から抽選で
5名様に各種MSFグッズ(右写真は一例です)を差し上げます。



郵便はがきに、ご住所、お名前、年齢、職業、アンケートの回答をご記入のうえ、左記
の住所までお送りください。2015年7月末日消印有効

宛先 国境なき医師団日本・広報部宛

Web トップページ→MSF図書館→読み物→『REACT』 2015年7月末日まで受付
※お寄せいただいた個人情報はアンケート分析にのみ利用いたします。

◎次の①～④には[ア そう思う イ そう思わない ウ どちらともいえない]から選択
して、⑤⑥には自由回答でお答えください。

①世界の人道危機や医療ニーズへの理解は深まりましたか。②MSFの活動への理解
は深まりましたか。③MSFは活動について十分に透明性をもって報告していると感じます
か。④今後もMSFを支援していくと思いますか。⑤特に印象に残った記事を2つ教
えてください。⑥ご意見・ご感想を自由にお聞かせください。

命を救うため 私たちにはできることがある

残酷な暴力の応酬、劣悪な環境での避難生活、そして手の届かない援助・医療。
いま現在も続く紛争によって人びとが過酷な生活を強いられている
南スーダンの各地で、国境なき医師団(MSF)は、戦線を越え、
あらゆる種類の必要な医療を届ける道を、模索しながら進んでいます。
その挑戦は、シリア、中央アフリカ共和国、その他の多くの地域でも続きます。
“一人でも、多くの命を救いたい”、その思いを実現するために……
どうぞ現地の状況を知り、これからもMSFの活動を支えてください。



内戦を逃がれてきた人びとが暮らす北部ベンティウのキャンプに、MSFは病院を設置。

©Jean-Pierre Amigo/MSF

2015.6 CONTENTS

ACTIVITY NEWS

4 シリア
私たちには
届けるべき援助がある

6 エボラ出血熱
極限まで、そしてその先へ
—エボラ緊急援助の1年

8 コンゴ民主共和国 IN FOCUS
ワクチンを届けるために。
今日も道なき道を行く

10 中央アフリカ共和国
悲劇は終わっていない

11 ウクライナ
停戦後も続く砲撃
移動診療が命綱に



北東部のランキエンなど紛争の影響で患者が倍増している風土病カラアザールは、治療を受けなければ死に至る寄生虫症。MSFは専門治療を提供している。

©Karel Prinsloo



過酷な環境のイダ難民キャンプで流行はじめた、はしかの症状で2歳の娘を診療所に連れてきた母親。MSFは集団予防接種も実施。

©Karin Ekholm/MSF



スードンとの国境線を巡る激しい戦闘が続くバマト近郊で、避難生活を送る人びとのための移動診療で、妊婦を診察するMSFのスタッフ。

©Ashley Hamer

5 VOICE 派遣スタッフの声
村田慎二郎(活動責任者/シリア)

12 定例総会のご報告
2015年 国境なき医師団日本 定例総会
2014年度 国境なき医師団日本 財務報告

14 支援者のひろば

Field Stories フィールド・ストーリーズ

15 的場 紅実(薬剤師/ウガンダ)
菊地 錠子(看護師/中央アフリカ共和国)

今号掲載国

国境なき医師団の活動国・地域

MSF日本からの派遣者数(19ヵ国・40人/2015年4月3日現在)



ボートでしかたどりつけない場所に届ける移動診療。上ナイル州のMSFチーム。



MSF日本からも2014年には延べ31人のスタッフを南スーダンに派遣。写真はマラカルで統撃による負傷者治療に当たる白川優子看護師。



避難生活中、急性栄養失調で命の危機に陥る子どもたち。レールでは栄養治療センターを設置。

©Andreea Campeanu

南スーダン 各地で紛争にあえぐ人びとに 医療を届ける

2013年末の内戦勃発以降、各地で混乱状態が続く南スーダン。国境なき医師団(MSF)は、全国で活動を展開。紛争による負傷者や難民・避難民の治療をはじめ、拡大する風土病カラアザールや栄養失調の治療、集団予防接種、産科ケアの提供など、幅広い医療を提供しています。

[MSFの活動状況] (2014年1月~12月)

	外来診療	入院診療	外科手術	分娩
	80万3694件	4万6078件	6658件	1万8146人





- 1 集団予防接種を行う地域は、歩いて反政府武装勢力の支配エリアを抜けて行くしか手段がない。
- 2 雨季のぬかるむ泥道に進路を阻まれる。
- 3 降りしきる雨の中を行く民兵。その手にはロケット弾が握られていた。
- 4 村人にワクチン接種の重要性と参加を呼びかける。広報活動も集団予防接種の大切な過程。
- 5 ポリオワクチンの経口接種を受ける子ども。MSFは、紛争地や難民キャンプなど予防接種が普及しにくい地域に集団予防接種を届ける活動を毎年展開している。

写真は全て©Phil Moore



ワクチンを届けるために。 今日も道なき道を行く

国境なき医師団(MSF)が目指したのは、コンゴ東部。北キブ州に位置する「千の丘」の別名を持つマシの、医療が全く届いていない地域です。長引く紛争のために交通が寸断されたその地域で、MSFは集団予防接種を行うことを決めたのです。この辺りは、複数の反政府武装勢力と政府軍が紛争を行っており、襲撃を恐れた人びとは医療施設に行くことができずにいます。ワクチンは低温を保って運ぶ必要があり、MSFは、雇用した55人の運び手と共に千の丘を目指しました。道の続く限り車を走らせ、道がなくなった後は歩いて丘を越え、やぶをかき分け、武装勢力のチェックポイントを通過し——。徒歩で移動した時間は計6日間。このプログラムで4054人の子どもと妊婦に予防接種を行うことができました。

MSFでは、「届け、ワクチン！2015」キャンペーンを展開中。
詳しくは裏表紙をご覧ください。



7月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

8月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

9月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

10月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

11月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

12月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31



1 ドネツク州、砲撃され穴が開いてしまった天井を見つめる86歳のガリーナさん。

2 5歳の娘と共にMSFの心理カウンセリングを受けるスヴェトラーナさん(右)。自宅の庭に夫といふところを砲撃され、夫は亡くなってしまった。

3 ドネツク州の町で。週2回のMSFの移動診療の日、会場は薬を求める人で混雑する。せき止めや痛み止めですら人びとの手の届かないものに。

昨年2月に首都キエフで起きた反政府デモに端を発し、混迷を深めるウクライナ情勢。MSFは紛争勃発から負傷者治療の緊急対応を開始、その後、5月に国東部のドネツク州で激しい衝突が発生したのに伴い活動を拡大。必要な医療物資を供給し、同州の各病院の支援にあたってきました。今年2月にいったん停戦が発効されたものの、一部地域ではその後も砲撃が続きました。負傷者の急増と医薬品や医療物資の不足で保健医療体制は危機に直面しています。各病院の必須医薬品がなくなりドネツク州の病院で活動にあたつたMSFのミヒヤエル・レーシュ外科は現地の状況を次のように話しています。

昨年5月に激しい紛争がはじめられ、医療従事者も、薬も足りない中、家を追われた人びとは基礎的な医療すら受けられない危機的状況に置かれています。国境なき医師団(MSF)は紛争当事者双方の勢力範囲に拠点を置いて、移動診療で援助を届けています。

MSFは紛争に中立の立場から戦線の両側、25カ所にチームを配置して各市町村を移動し、医薬品や支援物資の配給、基礎医療や心理ケアの提供などを実行しています。高血圧や糖尿病など、治療の中止が命にかかる持病があるお年寄りにとっては、MSFの移動診療が文字通りの命綱となっています。

2011年からMSFがドネツク州内の刑務所で取り組んできた多剤耐性結核プログラムも、治療継続が生きるために唯一の術であるにもかかわらず、プロジェクトの存続が危ぶまれる事態に陥っています。治療の中止を回避するために最善を尽くしていますが薬剤供給にも支障が出てきています。紛争の代償は日ごとに増大しています。

戦線の両側から人びとを支援

合糸を使い果たし、釣り糸を使っていると聞いています。現地で援助をしているようです」

MSFは紛争に中立の立場から戦線の両側、25カ所にチームを配置して各市町村を移動し、医薬品や支援物資の配給、基礎医療や心理ケアの提供などを実行しています。高血圧や糖尿病など、治療の中止が命にかかる持病があるお年寄りにとっては、MSFの移動診療が文字通りの命綱となっています。

2011年からMSFがドネツク州内の刑務所で取り組んできた多剤耐性結核プログラムも、治療継続が生きるために唯一の術であるにもかかわらず、プロジェクトの存続が危ぶまれる事態に陥っています。治療の中止を回避するために最善を尽くしていますが薬剤供給にも支障が出てきています。紛争の代償は日ごとに増大しています。



1 戰闘のため病院にたどり着くのも難しく、多くの小児患者が重症化してから運ばれてくる。

2 首都バンギの総合病院で、MSFは救急外科部門を受け持つ。

3 純正された脚の治療を1年続けるマーヴィン・ドクベネモさん。「床に倒れた時は、自分は死んだと思いました」。

1991年、ソ連崩壊に伴い独立を果たす。2014年1月、当時の政権がEUとの経済連携交渉を中止。抗議した親欧米派がキエフで起こしたデモが紛争へと発展する。2月、政権崩壊へ。3月、ロシアがクリミア半島の併合を宣言。4月、東部で反政府勢力が政府庁舎などを占拠。5月下旬、東部で紛争が激化、現在に至る。

COUNTRY DATA

MSFの活動実績
(2014年2月~2015年3月19日現在)

負傷者の治療用物資 1万7900人分
基礎医療用の薬 1万3300人分
分娩用の医薬品 2000人分
移動診療の拠点 25カ所
治療中の多剤耐性結核患者 170人

MSFは紛争に中立の立場から戦線の両側、25カ所にチームを配置して各市町村を移動し、医薬品や支援物資の配給、基礎医療や心理ケアの提供などを実行しています。高血圧や糖尿病など、治療の中止が命にかかる持病があるお年寄りにとっては、MSFの移動診療が文字通りの命綱となっています。

2011年からMSFがドネツク州内の刑務所で取り組んできた多剤耐性結核プログラムも、治療継続が生きるために唯一の術であるにもかかわらず、プロジェクトの存続が危ぶまれる事態に陥っています。治療の中止を回避するために最善を尽くしていますが薬剤供給にも支障が出てきています。紛争の代償は日ごとに増大しています。

MSFのロジスティシャン、ジャスティン・ドクベネさんは言います。
「暴力は近所で続いている。負傷する人、殺される人……この国の非常時はまだ終わっていないません」

「到着した患者にはまず『あなたがここにいるのは治療のため。宗教や武装集団とは関係ない』と説明します。ここではそれが重要なのです」
ドクベネさんは言います。
「暴力は近所で続いている。負傷する人、殺される人……この国の非常時はまだ終わっていないません」

「MSFには、地域社会の一員であり、実情の把握を助ける現地スタッフがいることが強みです。MSFの援助を必要とする人びとの元に向かう努力を続けなければなりません」

MSFは紛争に中立の立場から戦線の両側、25カ所にチームを配置して各市町村を移動し、医薬品や支援物資の配給、基礎医療や心理ケアの提供などを実行しています。高血圧や糖尿病など、治療の中止が命にかかる持病があるお年寄りにとっては、MSFの移動診療が文字通りの命綱となっています。

2011年からMSFがドネツク州内の刑務所で取り組んできた多剤耐性結核プログラムも、治療継続が生きるために唯一の術であるにもかかわらず、プロジェクトの存続が危ぶまれる事態に陥っています。治療の中止を回避するために最善を尽くしていますが薬剤供給にも支障が出てきています。紛争の代償は日ごとに増大しています。

MSFのロジスティシャン、ジャスティン・ドクベネさんは言います。
「暴力は近所で続いている。負傷する人、殺される人……この国の非常時はまだ終わっていないません」

「到着した患者にはまず『あなたがここにいるのは治療のため。宗教や武装集団とは関係ない』と説明します。ここではそれが重要なのです」
ドクベネさんは言います。
「暴力は近所で続いている。負傷する人、

2014年度 国境なき医師団日本 財務報告



特定非営利活動法人 国境なき医師団（MSF）日本の2014年度の財務諸表は、あくさ監査法人による会計監査を受け、3月の総会にて承認されました。ここに、2014年度の財務状況をご報告します。

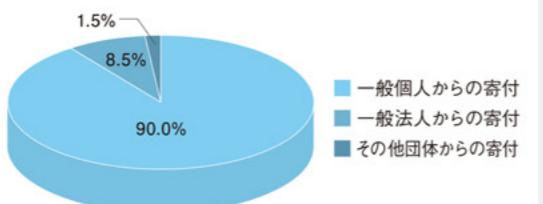
2014年度は、シリアでの内戦が深刻化し、最大規模の人道危機となりました。MSFは、中央政府による活動許可が得られず、さまざまな武装勢力の攻撃という危機にも直面する中で、人びとに医療・人道援助を届ける努力を続けました。南スーダン、中央アフリカ共和国、コンゴ民主共和国などでも、紛争に苦しみ、医療にアクセスできない人びとに援助を続けています。一方、3月からエボラ出血熱が西アフリカ諸国に拡大し、未曾有の大流行となつたことから、MSFはいち早く緊急援助活動を開始、年間を通じて懸命の対応に当りました。

MSF日本は、パートナー事務局の一つとして、活動現地での援助活動にあたるオペレーション事務局からの資金ニーズ、および海外スタッフ派遣について懸念の対応に当りました。

寄付収入は総額70.3億円（前期比20%増）でした。

皆さまからの絶大なるご支援、ご厚意により、2014年度のMSF日本の寄付収入は総額70.3億円、その他の収入を含めた総収入は総額70.5億円と、どちらも過去最大となりました。

日本の寄付収入の支援者別内訳



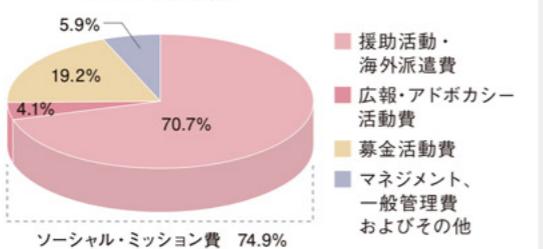
一般個人支援者数	285,223人
一般法人支援社数	8,872社
その他支援団体数	2,516団体
延べ支援者総数	296,611

支援者総数は、前年比で11%増加しました。寄付金以外にも、現物および役務・サービスのご提供という形でのご支援を数多くいただきました。

援助活動に係る支出は総額69.7億円（前期比19%増）でした。

MSF日本の、2014年度の活動別の支出内訳は、右図の通り。寄付増収に支えられ、援助プログラム支援金が48.4億円と大幅に拡大しました。活動地スタッフの募集活動、ならびに広報・アドボカシー活動と併せて、ソーシャル・ミッション支出は計52.1億円。レシオ（支出総額に占める割合）は74.9%で過去最大級となりました。

援助活動に係る経常費用 69.7億円の内訳



項目	(百万円)
① 援助活動・海外派遣費	4,928
・人道援助プログラム支援金	4,844
・国内外でのプログラム・サポート等	84
② 広報・アドボカシー活動費	289
③ ソーシャル・ミッション費(①+②)	5,217
④ 募金活動費	1,338
⑤ マネジメント、一般管理費およびその他	414
援助活動に係る 経常費用合計(③+④+⑤)	6,970

MSF日本の財務上の基本方針

MSF日本は、MSFが世界各地で展開する医療・人道援助活動に対して人材面・資金面で積極的に関与すること、および援助活動地の人びとが置かれた窮状を目撃者として広く社会に情報発信することを最大の使命とし、これらの活動に重点的に経営資源を配分しております。人道援助活動と広報証言活動という、二つの使命の遂行に要する費用を、ソーシャル・ミッション費と称し、同費用が総費用に占める比率（ソーシャルミッション・レシオ）を経営の効率性の尺度としています。

一方、長期的な観点から、突発的大規模災害発生時の緊急援助活動にも迅速かつ円滑に対応できるよう、一定水準の剩余金を蓄積することで財務基盤の安定化を図っています。

「一円でも多くの寄付金を現地へ送ってほしい」という寄付者の方々の切実な声をしっかりと胸に刻み、MSF日本では鋭意、コスト削減をベースとした、さらなる効率経営の実現に取り組むと共に、その成果を明瞭に開示し、透明性を確保することを心掛けています。

●国境なき医師団は活動と財務の透明性と説明責任を重視しています。

監査法人による厳正な監査を経た会計報告を公開する年次報告書を毎年発表。

4月発行の『活動報告書2014年度版』を公式ウェブサイト（www.msf.or.jp）下段【MSF図書館】から閲覧・ダウンロードできます。

郵送ご希望の方は、Webトップページ下段の【資料請求】から。◎お電話でも承ります。Tel.0120-999-199 (9:00~19:00 年中無休)



2015年 国境なき医師団日本 定例総会



MSFインターナショナル会長も交えたエボラのワークショップの様子。

今回の総会ではMSF日本の2014年度の活動と財務に関する報告・承認と役員改選を行い、会長には加藤寛幸医師が今回新たに選任されました。総会は、MSF日本の活動に関する最高意思決定の場であると同時に、MSFの活動経験者を中心とする会員が集う、年に一度の貴重な交流の場です。

3月21日、22日にかけ、東京・恵比寿において、国境なき医師団（MSF）の2015年総会が開催されました。総会は、MSF日本の活動に関する最高意思決定の場であると同時に、MSFの活動経験者を中心とする会員が集う、年に一度の貴重な交流の場です。

理 事

会長	加藤 寛幸 Hiroyuki Kato MD
副会長	青池 望 Nozomi Aoike MD
副会長	渥美 智晶 Tomoaki Atsumi MD
専務理事	森山 秀徳 Hidenori Moriyama MD
会計役	沢田 さやか Sayaka Sawada
	須田 洋平 Yohhei Suda
	安藤 恒平 Kohei Ando MD
	大谷 敬子 Keiko Otani
	キム・ナムニヨール Nam Ryeol Kim MD
	ジル・デルマス Gilles Delmas

監 事

黒崎 伸子 Nobuko Kurosaki MD
フレデリック・ヴァラ Frederic Vallat

前列左より：沢田 さやか、青池 望、加藤 寛幸、渥美 智晶、森山 秀徳
後列左より：フレデリック・ヴァラ、ジル・デルマス、須田 洋平、安藤 恒平、大谷 敬子、黒崎 伸子
右上 索 内：キム・ナムニヨール

新会長あいさつ

2015年3月の国境なき医師団(MSF)日本の総会において、会長に就任いたしました。皆さまが私たちの活動に関心を持ち、ご支援くださっていることに、心より感謝申し上げます。

MSFの活動を志して20年、実際に活動を始めてからでも10年以上が過ぎました。初めて参加したのは2003年のスーダンの孤児院での活動でした。そして昨年は南スーダンや、エチオピアのエボラの活動に参加しました。10年以上の時を経ても、残念ながら世界が良くなっているとは、とても思えませんでした。2015年の現在も、いまこの瞬間に、子どもたちが、薬がない、食べるものがいるというだけの理由で死んでいます。爆撃の恐怖に眠れぬ夜を過ごす人たちがたくさんいます。

会長という重責を務めさせていただくことになったのは、自分のためでも、MSFのためでもありません。そんな悲しい死をできるだけ減らしたいからです。活動地で一緒に働いた人たちや、出会った子どもたちの顔を忘れるることはできません。救う手立てを見出せないまま帰国の途に就く私を、笑顔で見送ってくれた南スーダンの子どもたちのことは脳裏に焼きついで離れません。エボラで自分の弟を亡くしながら治療施設で他の子どもたちの兄代わりとなり世話をしつづけた11歳の少年の姿、エボラで母親を亡くした5歳の女の子が僕の手を握りしめた時の感覚は、今でも私の中にしっかりと残っています。

どうか、こんな悲しい思いをする人を減らすために、皆さまの力を貸しください。そのお気持ちを必ず活動地で待つ人たちにお届けすることを約束します。



加藤 寛幸
Hiroyuki Kato

1965年、東京都出身。小児科医。専門は小児救急、熱帯感染症。島根医科大学卒業、タイ・マヒドン大学熱帯医学ディプロマ取得。東京女子医大病院、オーストラリアの小児病院、静岡県立こども病院等に勤務。MSFには2003年より参加し、東日本大震災緊急救援、南スーダン、エボラ緊急救援（エチオピア）などで活動。2015年3月までMSF日本副会長。

加藤 寛幸

Field Stories



フィールド・ストーリーズ

人道援助の現場で出会った人ひととの交流、明日への活力源となった出来事など。
国境なき医師団(MSF)のフィールドでの活動中に、スタッフが出会ったストーリー。



お薬は貴重な支援のたまもの

的場紅実
Kumi Matoba

薬剤師
ウガンダ

紛争状態が1年以上も続く南スルタン。多くの人びとが、国外での避難生活を余儀なくされています。私が今回派遣されたのは、ウガンダ北部にあるアジュマニという地域で、そこには南スルタンから逃れてきた約7万人が暮らす巨大な難民キャンプがありました。

さまざまな支援団体が入っているものの、キャンプでの生活は厳しく、人びとは多くの健康上の問題にさらされます。特に、蚊によって媒介され、命を落とすこともある感染症マラリアに罹患する人は多く、私の任期中は流行のピークではなかったものの、1ヵ月に6000人分に近い量の治療薬を供給していました。

MSFでは適正な品質が保証された医薬品のみを使用します。多くをジェネリック薬(後発医薬品)でそろえるなどコストを下げる努力をしていますが、提供する医療サービスの質は落とさない方針で診療にあたります。そして、こうした遠隔地で必要な医薬品を過不足なくそろえ、気温が高く電力供給も不安定な場所でそれらを良好な状態で保管することは非常に難しく、多くのコストがかかるのも事実です。これら寄付金で賄われた医薬品をいかに無駄なく調達し、有効活用するか、薬剤師の腕が試された今回の派遣でした。



地域の病院薬局との連携は不可欠。

難民キャンプ内のMSFの診療所へ直接薬を届ける。



母と子に寄り添う病院づくり 初めての活動での挑戦

菊地紘子
Hiroko Kikuchi

看護師

中央アフリカ共和国

いまだ紛争の収まらない中央アフリカ。チャドとの国境に近い地域病院で、地域住民と国内避難民のケアにあたりました。初めてのMSF参加となった今回の活動で、私は小児科ナースだった経験を生かして、助産師と共に早産児や低出生体重児をケアする「カンガルーケア室」を開設しました。体温を保つ保育器のない現場で赤ちゃんの命を救うためには、母と子の肌を密着させるケア(カンガルーケア)が非常に簡便で有効な手段です。また、チューブを通してミルクを注入する場合でも、母の乳房を子の口に含ませることで、母乳の分泌促進や母子の愛着形成を促すことができます。このような特別なケアを、現地スタッフができるように支援しました。産科病棟で助産師の助手として働くのは、現地雇用の女性たちであり、国家資格はありません。しかし、彼女たちは働きながら患者の母と子のために日々奮闘しています。特別なケアの方法を身に着けたことで、彼女たちの士気が高まり、母と子により良いケアを提供できるようになるのを目の当たりにし、私もやりがいを感じられた経験でした。



カンガルーケア室の母子とスタッフ(右)。

ミルクのチューブと母親の乳房と一緒に口に含ませる。



国際色豊かなMSFチームと、助け合いながら試練も乗り越えられた。(右から2番目が筆者)

国境なき医師団

支援者のひろば



国境なき医師団(MSF)へのご支援を誠にありがとうございます。日本から活動地に派遣されるスタッフ、事務局のスタッフは、いつも支援者の皆さまの声に大きな励ましを頂いています。この「ひろば」のコーナーでは、さらに皆さまのさまざまな声をお聞きし、スタッフの側からもそれにお応えし、MSFの活動を支える輪を広げていきたいと考えております。

今回は、ある支援者の方の「声」をご紹介します。

なぜMSFに寄付をはじめたのか?……そこには実は、素敵なご家族との縁、寄付に込められたご本人の夢がありました。

富山県富山市 阿部温子様

1年前に息子が生まれてから、MSFにクレジットカードで寄付したり、インターネットのクリック募金をしたりしています。きっかけは、父が“幸せのおすそわけ”として、MSFに寄付をしていることでした。父が毎年書き変えている「遺言書」には「私が死んだら毎月の寄付は停止するように」とあります。生きていることが幸せなことなのだと毎日思うようにしています。

子どもを産んでから、より一層、生きてきた国や場所が違うからといって明日の命が分からない人たちがいてはならないと思うようになりました。私にできないことを現地で行っている勇敢な人びとのやる気につながってほしい、あきらめかけたときや絶望したときに遠くから応援している人がいることを忘れないで、という気持ちを寄付に込めています。

私には夢があります。障害のある子ども、毎日つらく泣いている子ども、さまざまな子ども達が目標をもち、多くの選択肢を持つ未来をつくることです。そんなことできるわけがない、夢物語だ、と思うこともあります。しかし、MSFの活動を知ると、困っている人がいるから助ける、という当たり前のことができないはずがないと勇気づけられます。この気持ちを忘れないように細く長く支援を続けていきたいです。

「応援している人がいることを忘れないで」という阿部様の「声」を読んだスタッフは感激……。これからも、活動地で辛いことに直面したとき、この言葉を思い出し「一人ではない」と、勇気を取り戻すことができるでしょう。



皆さまの
お便りを
お待ちして
います

あなたの「声」を、MSFに届けてみませんか?

REACT編集部は以下の質問へのお答えをお待ちしております。

[質問1] 記念日など、あなたがMSFに寄付するきっかけとなった身近なできごとを教えてください。

[質問2] あなたが寄付に込めている思い、スタッフに聞きたいことは何ですか?

[質問3] 現在MSFは「届け、ワクチン! 2015」キャンペーン(本誌裏表紙参照)を実施中。

あなたの予防接種にまつわる思い出を教えてください。

○お答えは上の質問から一つ選んでいただいても、すべてに対してでもかまいません。

○お便りを頂いた方の中から、抽選で3名様にMSFオリジナルグッズをお送りします。

[宛 先] 2015年6月末日締切

郵 送 〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1

E-mail book@tokyo.msf.org

早稲田SIAビル3F

国境なき医師団日本 REACT編集部宛

救えるはずの、多くの命のために。

遺産・お香典からの寄付で、その遺志は希望に変わります。

遺産や相続財産の有意義な活用のために、MSFへの寄付を選ぶ方が増えています。パンフレットをご希望の方は、下記のウェブサイトまたは電話でお申し込みください。MSF日本は認定NPO法人ですので、寄付していただいた遺産は非課税扱いとなります。

Web www.msf.or.jp
(トップページ下段 → 資料請求)

Tel 0120-999-199
(9:00~19:00 年中無休)